様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１１７６４

研究課題名（和文）在伯日系高齢者の心理社会的発達に関する縦断的研究

研究課題名（英文）A prospective study of psychosocial development among elderly Japanese-Brazilian

研究代表者
服部　紀子（Hattori, Noriko）

横浜市立大学・医学研究科・客員研究員

研究者番号：１０３２０８４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：第二次世界大戦後にブラジル南部へ移住した日系一世が高齢期を迎えている。日本の高齢者では、近所付き合い、知人友人との食事や自治会などの活動があると生活満足度が高いが日系人を対象とした調査はない。65歳以上の日系人53名を対象とし質問紙調査を行った結果、社会交流の頻度や余暇活動の有無による生活満足度尺度Kの有意な違いは認められなかった。しかし、同世代の日本人よりも得点が高かった。インタビュー調査では、10名の高齢男性を対象とし、エリクソン心理社会的発達目録検査等を実施した。その結果、「人生への誇り」「家族の成長」「子どもへの知恵の伝授」等が心理社会的発達と関連していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ブラジル日系高齢者を対象とした調査から、心理社会的発達の現状と生活満足度、ヘルスリテラシーや言語環境について明らかになった。加えて、ハワイにも多くの日系人が存在しその生活を知ることで、世界各地で多くの日系人が様々な課題と直面している可能性が示唆された。少子高齢化と国際化の中での課題は今後ますます増えていくと考えられ、今回の調査で得られた知見をもとに、さらなる調査と支援を行っていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：The first generations of Japanese-Brazilian have faced aging. Although elderly people felt happy in case of associating with friends and neighbors in Japan, there is no study about the life satisfaction among elderly Japanese-Brazilian. Fifty-three elderly Japanese-Brazilian were asked questionnaires (Life satisfaction inventory K; LSIK). As a results, there were no significant differences whether subjects had associations with friends and leisure activities. The LSIK scores on elderly Japanese-Brazilian was higher than those of elderly Japanese lived in Japan.
We interviewed ten men elderly Japanese-Brazilian about Erikson Psychosocial Stage Inventory (EPSI). “Pride for my life,” “Development of family,” “Initiation my children into wisdom,” might be related to psychosocial development.

研究分野：老年看護学

キーワード：日系人　高齢者　健康

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本は戦前から戦後に至るまで労働力過剰、食料不足のため南米諸国等へ多くの移民を送り出した。ブラジルが最大の日本人移民受け入れ国であり、現在約 2000 人いるといわれる一世は高齢期を迎えている。ブラジル日系高齢者が直面している問題として、「健康」に次いで「言葉」が高いこと、移民の生活環境によって精神的健康が異なることも明らかになっている。栄養状態や健康などの調査はいくつか報告されているが、ブラジル日系高齢者の心理社会的発達の状況と影響要因を縦断的に調査した研究はみあたらない。高齢者の心理面での健康の最終目的は満足した人生を全うすることであり、それを達成するための支援が必要である。

２．研究の目的

(1)ブラジル日系高齢者の心理社会的発達とその影響要因を縦断的に明らかにし、自我の統合の獲得支援に対する示唆を得ること

(2)ブラジル日系高齢者の生活満足度と社会参加や余暇活動との関連を明らかにすること

(3)ブラジル日系高齢者のヘルスリテラシーと言語環境との関連を調査すること

３．研究の方法

(1) 研究の趣旨を理解し同意が得られた日本語での会話が可能な 65 歳以上のブラジル在住日系高齢者に 60 分程度のインタビューと質問紙調査を行った。インタビュー内容は、居住環境、活動性、家族の日本語コミュニケーション能力、帰化意識、宗教などとし、エリクソン心理社会的発達目録検査や主観的健康感などを質問紙で調査した。対象者の選定・紹介はブラジル在住の日系人医師の協力を得て、日系人対象の巡回診療健診の際に実施した。インタビュー内容は、質的機能的に分析し、心理的発達に影響する要因を探索した。

(2) ブラジル南部の日系人を対象とした健診受診者 137 名のうち、日本語による日常会話が可能で、研究参加に同意の得られた 65 歳以上の者 53 名を対象とした。調査項目は、言語環境、社会交流の有無、生活満足度尺度 K(Life Satisfaction Index K; LSIK)とした。LSIK は得点が高いほど生活満足度が高いとされる。統計学的分析は IBM SPSS22.0 for Windows を使用した。なお、本研究は研究者所属機関の倫理委員会の承認を得た。

(3)健康に関する情報を主体的に選択・活用していく能力としてヘルスリテラシー（以下 HL）という考え方がある。高齢期を迎えているブラジルの日系永住者の生活環境は HL に大きな影響を与えると考えられる。しかし, ブラジル在住日系高齢者の HL について調査された研究はない。そこで, 本研究では, 以前に収集したブラジル在住日系高齢者の HL と言語環境に関するデータにて関連を調査した。研究デザインは横断研究とし, 言語環境や生活環境, および HL（The14—item health literacy scale for Japanese adults ; HLS-14）について 65 歳以上のブラジル南部在住の日系高齢者に質問紙調査を行った。

４．研究成果

(1)高齢男性の心理的発達とその要因に関して、「人生への誇り」「家族の成長」「子どもへの知恵の伝授」などが心理社会的発達と関連していることが示唆された。また、「自分の死については考えたことがない」「死への準備を全くしていない」という特徴が明らかになり、高齢期になってもなお、前向きに過ごしていた。一方で、女性の対象者の仲には子どもが成長し社会的に活躍し巣立っていってしまった寂しさを訴える者もいた。また、心身の加齢変化に伴い、日本への思いが強くなっている傾向がみられ、男女での違いがみられる可能性がある。

(2)対象者 53 名の平均年齢は 75.3±5.3 歳、女性は 26 名(49.1%)であった。日本語の読み書きがどちらも可能な者が男性 25 名(92.6%)、女性 19 名(73.1%)であった。ポルトガル語の読み書きがどちらも可能な者は男性 17 名(63.0%)、女性 12 名(46.2%)であった。日本語での交流が「ある」者は対象者全体で 44 名(83.0%)であった。社会交流の頻度や余暇活動の有無による LSIK の有意な違いは認められなかった(表 1)。また、男性 5.5±1.9 点、女性 4.9±2.0 点で日本の高齢者より得点が高かった。以上より、社会交流、余暇活動以外の生活満足度に影響する要因について検討していく必要が示唆された。

表1：性別、言語環境および社会交流とLSIK得点との関連			
		mean±SD	p
性別	男性(n=27)	5.5±1.9	0.552
	女性(n=26)	5.0±2.0	
日本語の読み書き	可(n=44)	5.3±2.1	0.697
	不自由(n=7)	5.1±1.1	
ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ語の読み書き	可(n=29)	5.1±1.9	0.683
	不自由(n=22)	5.4±2.0	
家族以外との交流頻度	高い(n=39)	5.1±2.0	0.964
	低い(n=14)	5.6±1.9	
社会活動の参加	あり(n=14)	5.4±2.0	0.683
	なし(n=37)	5.2±2.0	
余暇活動	あり(n=46)	5.2±1.8	0.245
	なし(n=7)	5.0±2.5	
フィッシャーの直接確率法			

(3) 分析対象は 52 名（うち女性 28 名）であった。HL と，言語環境およびブラジルでの教育の有無による違いについて調査した結果，HL に男女差はみられなかったが，年齢が高いほど機能的 HL,伝達的 HL,HL 合計において得点が低いという有意な逆相関が認められた（p<0.05）。すなわち，高齢であるほどヘルスリテラシーが低い状態であることを示した。また，言語環境では，有意な差は認められなかったものの，対象者自身が伯語を話せるほど機能的 HL が高い傾向と，ブラジルで教育を受けた経験がある者はない者より機能的 HL,批判的 HL と HL 合計が高い傾向にあった。そのため，今後は HL や年齢など対象者の特性にあった保健指導を行う必要が示唆された。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　1 件）
1 坂本沙也加、佐々木晶世、土肥眞奈、服部紀子、森口エミリオ秀幸、叶谷由佳、日本健康医学会雑誌、査読有、26 巻 1 号、2-6.
DOI：https://doi.org/10.20685/kenkouigaku.26.1_2

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　0 件）

○取得状況（計　　0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：叶谷 由佳
ローマ字氏名：Yuka Kanoya
所属研究機関名：横浜市立大学
部局名：医学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80313253

研究分担者氏名：土肥(菅野) 眞奈
ローマ字氏名：Doi Mana
所属研究機関名：横浜市立大学
部局名：医学部
職名：講師
研究者番号（8 桁）：50721081

研究分担者氏名：野村 明美
ローマ字氏名：Akemi Nomura
所属研究機関名：国際医療福祉大学
部局名：成田看護学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：10290040

研究分担者氏名：水嶋 春朔
ローマ字氏名：Shunsaku Mizushima
所属研究機関名：横浜市立大学
部局名：医学研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60281739

研究分担者氏名：青木 律子
ローマ字氏名：Ritsuko Aoki
所属研究機関名：横浜市立大学
部局名：医学部
職名：助教
研究者番号（8 桁）：90290048

研究分担者氏名：長田 久雄
ローマ字氏名：Hisao Osada
所属研究機関名：桜美林大学
部局名：自然科学系
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60150877

(2)研究協力者
研究協力者氏名：佐々木 晶世
ローマ字氏名：Akiyo Sasaki

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。